

半年ぶりに見る母親の節子の姿に、磯貝達夫は大きなため息をついた。

「ここ最近、ずっとこうなんですよ」

介護担当の田中俊子が穏やかに言う。それが却って内面の苛立ちを鮮明にしているように感じられて、達夫は何とも言えない気分になる。

介護施設「さくら園」の広い駐車場。節子はそこにうずくまり、アスファルトの上に白いチョークで四角形や三角形、丸、そのほか形容しがたい幾何学模様をいくつも描いていた。

六月に入り、北海道もようやく初夏と呼べるような気候になった。吹く風は匂い立つような緑を含み、野鳥は来る夏への期待感を膨らませながらさえずっている。

「チョーク、取り上げてみすぐにとっかから持ってくるんです」

「すみません。ご面倒をおかけして」

節子は夫との死別を機に、周りの意見も聞かずに自分の持家と土地を勝手に売却し、そこで得た金で「さくら園」の入居を決めた。それを知った達夫は驚嘆したと同時に腹立たしく思った。相談してくれてもいいじゃないか。こんな辺鄙な場所ではなく、頻繁に立ち寄れる札幌市内の施設を検討したのに。

「それでは、私はこれで。何かあったら呼んでください」

俊子はその場を離れた。隅にバケツとモップが置きっ放しになっているのは、後で掃除をしておけという無言の指示だろう。

じりじりと強くなってい日差しよって空気が熱を帯びる。それが達夫の心に小さなささくれを拵えた。

「母ちゃん、もう止めるよ」

節子からは何の反応もない。アスファルトに滑るチョークの乾いた音が青空に吸い込まれていく。

「母ちゃん」

両肩に手を添える。その骨ばった感触に思わず手を引っ込めた。これが俺のお袋。やるせない気分でもたため息をつく。

入園当初、達夫は心細いだろうからと何かと時間を見つけては妻と子供を連れて顔を見せに来ていた。しかし節子の態度はいつもそっけなく、や

がては罵りにも似た言葉を投げつけるようになった。すでに現在の兆候が現れていたのだろう。当然のようにやがて妻も子供も来ることを拒むようになり、自然、達夫も足が遠のいていった。

節子の描く幾何学模様が広がっていく。

「ほら、掃除するからな」

達夫がチョークを取り上げようとすると、節子は思いがけず素早い動きで抵抗した。その弾みで手からチョークがこぼれ落ち、アスファルトの上で割れた。一瞬の沈黙の後、節子はパジャマのポケットから真新しい一本を出し、再び描き始めた。

「いい加減にしろよ。完全にボケちまいやがってよ」

思わず怒鳴っていた。抑制が効かなくなつた達夫は、自分の母親に対して罵詈雑言を何度も浴びせた。しかし何を言っても節子から何らかの反応を得ることは出来ない。肺に穴が開いたような息が漏れた。

母ちゃんはもう俺のことも解っていない。

母ちゃんにはもう何も残っていない。

理解していたとはいえ、改めて事実を認めざるを得なかつた。そして砂が崩れるように自分の母親が衰え、記憶をなくし、この世から消えていくのをただ黙って見ているのは耐えられなかつた。

突然、達夫の身体の奥から得体の知れない感情が沸き起こつた。それは理不尽とは知りつつも自分自身では制御できない、確かな熱を帯びた激しい感情だつた。

達夫はモップの柄の中心付近を持ち、ゆっくりと節子に近づいた。自分が何をするのかは充分解っていた。止めるなら今だということも。

「母ちゃん、今、楽にしてやるからな」

柄を握る手に力を込め、大きく振りかぶる。

「今日はいいい天気ですね」

背後から聞こえたその声に、達夫は飛び上がらんばかりに驚いた。

「北海道もいい季節になりました」

園長の友利良治だつた。眩しそうに空を見上げながら、薄くなった頭髪を撫でていた。達夫の鼓動が加速度的に増していく。

「ああ節子さん、今日もたくさん描きましたね」

柔和な笑顔を浮かべて友利が声をかける。達夫はどうしたらよいのか解らず、とりあえず「ご迷惑をおかけしています」とだけ言った。

「迷惑？とんでもない」

友利の声は表情と同様に柔らかい。

「でも駐車場こんなにしちゃって」

「気にしないでください。消そうと思えばいつでも消せますから」

「え？」

「私はね、節子さんが何を描くのかいつも楽しみにしてるんですよ。ここにあるのはこの人が今伝えたいことだと思うので」

「伝えたい、こと」

「彼女が描いているものには何か意味があると思うんです。それが知りた。でもね磯貝さん、残念ながら私には無理のようだ」

「どうしてですか？」

「恐らくその資格がないということでしょう」

そう言うと友利は達夫からモップを受け取った。かなり力が入っていたのだろう、達夫の指は握ったままの形で強張っていた。

「あの、俺」

「あ、そうだった、これから大事な会議があるんです」

友利は一度ポンと手を叩くと、「さっきの話、節子さんが伝えたいこと、解るのはあなただけだと思います」と言い残して立ち去った。達夫はその後ろ姿をずっと見送っていた。

再び静寂が訪れる。

「解るって、何を」

そう言われても何も思い浮かばなかった。この間にも節子が積み重ねた模様のいくつかは塗りつぶされ、増殖するように広がっている。達夫はそれを呆然と眺めていた。瞬間的な緊張から放たれ、生ぬるい疲労感を覚えている。

風が吹いた。細かな砂や塵がさわさわと音を立てる。それと一緒に白い綿のようなものが大量に運ばれてきた。楡の木の綿毛だった。「さくら

園」の裏手に楡の並木があり、この綿毛が風に乗ってここまで運ばれてきたのだった。

粉雪のようにふんわりとした綿毛は、瞬く間に駐車場全体を覆い尽くした。その中で節子は小さくうずくまっている。

そのとき、達夫の中にある光景が浮かんだ。

まだ子供の頃、寒さに白い息を弾ませながら両親に毎年連れて行ってもらった雪まつりの様子だった。考えてみれば、あの頃の父と母は今の自分よりも若い。その事実は今更ながら驚いた。

国内外の有名な城や当時の人気キャラクターなど、真っ白で大きな雪像の迫力に興奮したのを覚えている。どうして雪であんな大きなものが出来るんだろう。期間中、ずっとそんなことを考えていた。雪まつりが終わり、雪像が取り壊されるのが哀しくてたまらなかった。

あのときの外の寒さや往来する人々の楽しそうな声、そして何よりも柔らかに冷たい雪の感触が瞬く間に蘇ってくる。

母ちゃん、もしかして描いているのは。

真っ白な綿毛で覆われた駐車場に存在しているのは、自分たち親子が一緒に過ごしてきた時間。幼い達夫を歓喜させたあの雪像の数々。楡の綿毛が節子の行動に意味を添えた。

確かめる術などあるはずもなかった。しかし達夫には確かな手ごたえがあった。達夫の逆流しかけた血液が徐々に戻っていく。

解るのはあなただと思えますよ。

先ほどの友利の言葉が思い出された。

達夫の眼に映ったのは、節子の静かなる戦いの具現だった。勿論、今の節子がそんなことを意識しているとは思えない。それでも良かった。描かれた絵が何を意味しているのか感じられただけで満足だった。

達夫は節子の隣に同じようにうずくまった。そして転がっていた短いチヨークを手にとると、一緒に模様を描き始めた。

節子の細い髪に楡の綿毛が付いている。達夫はそっと手で取り、息を吹

きかけた。宙を舞った綿毛はすぐに地面に落ち、その白と同化した。

「母ちゃん、来年は雪まつりに行こうな」

達夫の言葉に節子何も返事をしなかった。